

冷たい
汗



冷たい汗

1

ここはどこだ？ 懐かしい高校の時の教室だ。ここには二人しかいない。放課後だろうか？ 全く一瞬で性交は始まっていた。相手は……恵理子だ。女性器のひだに肉棒が擦られ、狂ったようにかき回した。ますます肉棒は熱くなる。暑い、蒸し暑い。肉の油のような汗。机の軋み恥じらう嬌声が室内に響く。女は首を左右に振り喘いでいる。ばたつかせる女の足を肩に抱え激しく腰を使った。

「お願い戻って、私を捨てないで」なんだよ今さら、反則だね。

「……！ ……！」 「ん？ 恵理子？ どうした？」 と後ろへ顔を向けると……

「先生！ 先生！」 その声とともに額のあたりを叩かれた。

もうもうとしたニコチンの臭い。ギシギシというソファのばねの伸縮する音。週刊誌のすえたインクの臭いが漂ってきた。

なんだ？ なにしてるんだ？

瞼を微かに開くとシルエットが次第に線を結んで一つの像を描いた。逆光でかすんでいる先に女がいた。また額を叩かれた。黒い影が見える。仁王立ちで見下ろして。

覗き込んでいたのは秘書の古川真理亜だった。紺のスーツに腕組みしながら呆れた表情で睨んでいる。

夢？ 手をパンツの中に突っ込むと噴き出した精液で粘ついている。いい年して夢精をするなんてみっともない。まずいな、と思いながら、気づかれぬように我慢してはいていた。いつもの寝不足のような頭痛がする。髪をかきあげ、体を起こす。

真理亜はため息をついて雑誌を放った。機嫌が悪いようだ。

「先生、のん気なものですねえ。寝言を言っていましたけど」

一瞬ぎくりとした。平静を装ったがどぎまぎする。

「今朝は早かったんだね」出てきた言葉は嫌われるのを恐れている上司のような声だった。加納護はゆっくりと立ち上って、また腰を下ろした。ふう、また二日酔いだ。

「九時十分前です。いつも通りですよ」幼児を叱るような声で真理亜は応じた。

そうなんだ、と言いつつ今度はゆっくりと立ち上がった、寝違えたような筋肉の痛みに、いて、と護は呟いた。頭の痛みは治まらず、両手で顔面を覆った。

「はい」真理亜は無機質な声で二日酔いの薬を差し出した。それは苦くてまずいあの液状の薬だ。護は一気に飲み干し、うゑー、と呻き瓶を返すと、真理亜はくるりと踵を返しゴミ箱へ放る。護はかつかつかつというヒールの音を聞きながら右へ左へと振れている小さな尻を眺めていた。いい女だ、ここまではいいんだ。スタイルはスリムだし顔も悪くない。背が高く長い足で腰もほどよくくびれている。ややバストは小さいがこのくらいが丁度いい。

「真理亜」は「マリア」の当て字らしく、日本人でクリスチャンの母親が名付けたらしい。アメリカでの怪しげな宗教の信仰を強要する父親に母親が喧嘩別れして、真理亜は母の母国日本にやってきたという。大学は外語大を出ていて日本語も堪能で、下手な日本人より日本語を知っ

ている。有能だがただ少し常識が足りないというか、考えが稚拙なところがある。そうやって男を持ち上げ絡め取る秘術なのかも知れないが。

「またここで寝てたんですか？」

「ああ、昨日は大学で同期だった友達と飲んでたんだ。家に帰るよりこっちのほうが近いからね。寝床ぐらいどこだっていいだろ？」

強がっている。ここ数カ月というもの自宅へ帰った時はない。半年前、妻とは別れた。一人娘も妻のほうへ行ってしまった。

「今日のスケジュールですが……」と、真理亜がA5版のスケジュール帳をめくった。はいはい、と護はぼさぼさの髪を手ぐしで整えソファーに座る。首や頭を回したりして聞いていた。

「弁護士会から少年事件の件で接見にあたるよう要請されています」

護はうなだれこっくりと頷く。

「それと『死刑を考える』というフォーラムの出演依頼が来ていま……」

「断れ」護は咄嗟に言葉を切った。

「はい？」真理亜が問いただすと、

「断ってしまえ、そんなもん」

「結構出演料が出るみたいですよ」

「それから？」護は苛立って無視すると、

「まあ、先生がそうならいいですけど……」と真理亜大きく深呼吸して、

「今日はこれだけです」

「これだけ？」護は上向いて問いただすと、真理亜はにっこり微笑みながら頷いた。

ため息をついた。相変わらず仕事がない。じゃあ今から三十分後にここを出て、などと考えると、真理亜がなにか喋っている。

「前から気になっていたんですけど……」と真理亜が護の思考を遮った。

「あの人形なんですか？」

真理亜は壁に押し付けてある棚を指さしていた。護も指の先を向いた。それはロシアの民芸品の人形だった。厚紙のようなもので作った人形で偉そうな顔つきをしている男の顔が描いてある。なんとなく不気味かもしれない。

「ああ、あれ。マトリョーシカっていうんだ。ずいぶん昔だけど、その昨日飲んでた友達からもらったんだ」

「へえ……」

真理亜はまるで興味がなさそうに言うと、入口のすぐ前にある受付の席に戻った。この人形の面白いところを説明しようとしたが、やめた。真理亜はネイルアートにいそしんでいた。この辺が興奮めしてしまうところだ。

黒田啓一とは二十年近くの付き合いがある。ラガーマンらしく筋肉質のがっしりとした体躯に、何でもがはたと笑い飛ばす厚顔な男だ。黒田啓一と加納護は現役で東京大学に合格した。同じ高校の出身だが面識があったわけではない。

人生を上・中・下に分けて表すなら、「上」だと思う。だがそれをさらに三等分するなら明らか

に「下」だ。護の成績は悪くないのに、なんとなく損な役ばかり回ってくる。護はいつも「上
の下」を歩んで来た。護は東大に受かった。東大とは「東」に続いて「洋」や「海」をつけた私
立大学ではなく（これは東大生が他人に学歴を尋ねられた時に必ず言う）、あの「東京大学」で
ある。人の羨む学歴だが、ここ独特に存在するコンプレックスを感じた。自分の合格番号が書か
れた番号を発見して胴上げをされた。ここまでは「上」だった。だが地方から上京して合格した
連中は必ず除者にされる。進学校から受かった奴らの洗礼を受けることになる。まず単位の取り
やすい講義といった情報が入らないし、講義の履修登録の仕方も教務課の説明だけでは分から
ないことが多いのに、相談できる友達もいなかった。法学部の連中は大体官僚になったりして、「
国家の中核」に参画するような人生を歩むことになる。だが、その中核の卵の生活も芳しくな
かった。黒田と護は司法試験に合格した。これも「上」の人生だと多くの人言うだろう。だが司
法試験に合格したものは上位三分の一クラスの成績でないと、だいたい判事として採用されな
い。その下の三分の一が検事として採用される。残りは弁護士として働くことになる。これだけ
でもたいしたものだと思われるようだが、最近は司法制度も大きく変わり弁護士の数も増え過当競
争が起きているのが現状で、実際経営力のない弁護士は事務所をたたむといったケースが増え
てきている。となると大きな弁護士事務所に就職しなければならないが、テレビのバラエティ番
組に出て笑いの一つでもとれるような人気弁護士や、大手の顧客の仕事を請負い何回も勝訴を取
るような人物ならともかく、なんの取り柄もない護には、埃まみれの屋根裏部屋のような小さな
事務所を抱え、何回か電話がかかってくる国選弁護人の仕事口くらいしかない。それも大体が敗
訴だ。それでますます弁護士としての評価が下がり、螺旋階段をぐるりと下るのだ。こんなは
ずじゃなかった。脳裏に浮かぶのはそんなことばかりで、机に脚を載せタバコを吸いながら煙
を追っている、そんな毎日を送っている。黒田の成績は「上の中」くらいだろう。本当は判事
になりたかったらしいのだが、叶わず検事に採用された。黒田は「上の中」の職に就き、護は「上
の下」の職に就いた。

煙草の煙が充満し、テーブルの上に灰皿には吸殻が山のようになっていて、新聞やら週刊誌や
らが散らかっている。狭いうえに汚い、こんな弁護士事務所を構え国選弁護人の仕事をもらっ
てなんとか生計を立てている。典型的な貧しい弁護士。こういう弁護士は接見に赴いても自分勝手
な言い分ばかり並べ立て埒があかない。そして判決が気に食わないと弁護士のお前が悪いと怒り
をぶちまける。それでは満足に勝訴を勝ち取ることもできない。実績が作れないと、こっちの収
入もさみしくなる。全く……

「これが今日の新聞で、これが手紙です」

真理亜がどさっとテーブルに叩きつけるように持ってきた。

「もうちょっと手加減できないのかねえ、古川君」護は含んだ口調で言うと、「は～い。申し訳
ありませ～ん」というまるで気にしていない風で言葉を返し、かかってきた電話に追われていた
。

ため息をついて護は手紙を確認した。ダイレクトメールがほとんどで読む価値のないものばか
りだ。その中に角田浩一という筆圧の強い達筆の手紙があった。

「お父様から電話です」と真理亜が言った。

また金の催促だと勝手に考えた護は、「いいからそのまま切っ飛ばせ」と荒げると黙ってそ

の封を切った。

警察の留置場に容疑者がいる場合自白をとられやすい。冤罪を防ぐため、逮捕された被疑者には弁護士会から弁護士を派遣し接見する、という「当番弁護士制度」という制度がある。

タクシーがつかまらないので、仕方なく道玄坂を歩いて下っていった。さすがというべきか渋谷界隈のここでも人通りが結構ある。多くのラブホテルがあり、何組かのカップルが消えていくのを何度も見かけた。昼間からやたら下半身が元気らしい。

「体が目当てなんでしょう？」

服は青いリボンをつけた純白のシャツに紺のミニスカート姿の女子高生（昔流行ったなんちゃって女子高生かもしれない）は臆面もなくけらけらと大声で笑っている。男はパンツを崩しシャツは外に出してネクタイは首周りにぶら下げている。

どうやら男は胸の内側を見抜かれたらしく虚勢を張った。慌てて、

「ぜってーなんもしないよ。マジで、マジ。どうせヒマしてかんかんに怒ってたんだろ、カレンにドタキャンされて？ な、な、あそこでカラオケしようぜ。カラオケだけ」

「だってあそこホテルじゃない」

「いや、さ、どこだって同じさ。カラオケボックスなんて、混んでるよ」男はたたみかけるように気を引いている。

「キャンセルされて苛ついたからって言えば言い訳つくじゃん。ほんの一時間、いや三十分でいいからさ。俺の名前は言わない。お前も俺の名前を言わなきゃ、証拠は残らないし、ばれやしねえーよ」

制服の女は、しょうがないなあ、といった風で、結局二人してホテルに消えていった。

こんな時大人は注意すべきなのだろうか？ すべきなのだろうが、あまり人のことは言えない口だ。あの当時を過ごしたものなら、もっともありがちなパターンで普通に頷くだろう。どちらかといえば奥手の護でもそう思う。罪悪感などない。高校時代にまさに純朴につきあっていた恵理子が鬱陶しくなったのも、東京での暮らしが大きかった。

センター街の交差点で下りてきた道玄坂を見返してみた。陽が降り注ぎ乱反射していたアスファルトはもうもうと熱気を立ち上げている。なんとも異様な汗が背筋を伝っていった。気分の悪い汗だった。ふらふらになりながら背筋を伸ばす。

電車を乗り継いで横浜警察署に着くとエアコンの効いた建物に入った。護は熱から解放されるとふうと一息ついた。そして接見室に通された。灰色のコンクリートに囲まれている。そこは薄暗い檻のような室で、ただ目の前の細かい穴の空いた円い窓以外、頑丈そうなガラスで完全に内と外を隔てている。蛍光灯はちかちかと切れかかっているし、窓には鉄格子がはめられさらに薄暗くしている。

「検察官は常に悪と闘う。それも己の正義感に従って闘える」

と黒田は言っていた。しかし自分のような国選弁護人ともなれば店で万引きするような連中から、麻薬に手を染めた奴、強盗殺人や女房や子供にまで手にかけるような男にいたるまで守らねばならない。全く羨ましい限りだ。

調書を太腿の上に置き、鞆から六法全書を取り出し椅子に深く座った。調書をぱらぱらめくりながらあっさり罪を認めてくれれば楽なんだが、と護は思った。その時背広の内ポケットからち

くりと胸を刺された気がした。

ドアが開く音がして顔を向けると、やがて手錠をはめられた少年が奥のドアから現れた。

護ははっとした。初めて会ったのに既視感があった。似ている、と護は心のなかで呟いた。薄暗い表情だったが顔の輪郭や大きな瞳ときりっとした鼻筋、ふっくらとした唇、どこかで見たことのある顔だった。

少年は隆々とした肉体が爆発を押さえ込んでいるように見える。少年はパイプ椅子に浅く座ると首を小鳥が餌をついばむように軽く一礼した。右腕に包帯が巻かれている。「もみ合い時に負傷」とある。護は腰を折ったまま立ち上がり軽く一礼した。やんわりと、

「弁護士の加納護といいます。君が近藤崇君だね」と名前を確認した。

目線を合わさず面倒くさそうに崇は頷いた。体格は大きく髪は黄色でオールバック、唇の下に髭を生やしていた。いかにもといった印象だ。こういう奴は、と護は勝手に推測する。「家庭に問題がある」と。

「君の調書を読んでみたんだけど、ここに書かれている容疑を認めますか？」

静寂。崇は無表情で全く反応がない。

「僕は弁護士なんだ、なんでもいいから話してほしい。ここでこの部屋で盗聴されることもないよ。君が喋ったことは誰にも言わない。僕には守秘義務という決まりがあって、君が不利益になるようなことはない。ただ本当のことが聞きたいんだ。この内容は本当？」

また静寂が訪れた。やれやれ困ったことになるな、と護はパイプ椅子の背もたれに体をあずけ、調書を読み返した。

「本年七月十一日午後十時ごろ神奈川県横浜市S区において、少年近藤崇は帰宅途中の被害者松本梨加に対して、衣服をはぎ取って強姦した挙句、持っていたナイフで心臓を突刺し、出血性ショックで死に至らしめ逃走した」

次のページをめくる。

「神奈川県横浜市S区の被害者自宅近くで事情聴取の後逮捕。証拠。多量の血を浴びた被疑者のTシャツ、被疑者の指紋のついたナイフ、被害者女性の膣から検出された被疑者の精液」

護は読み終え、再び少年を見た。少年は護にギラリとした目線を向け、大きく呼吸していた。護はまた調書へ視線を下げた。

「被疑者氏名、近藤崇、年齢十七歳。保護者氏名、近藤恵理子、年齢三十四歳」

戸籍に父親の記載がない。（やはり）

「君のお父さんと面会したことはある？」目を伏せながらそう尋ねると、

「そんなの関係ねえだろ」初めて発したその声はドスのきいた重低音で、驚いた護が顔を上げると思わずのけぞってしまった。眼光鋭く窓ガラスに額をつけて睨んでいる。眉と目をつり上げ歯を食いしばって睨んでいる。心臓の鼓動が跳ね上がった。

「てめえにはかんげーねえんだよ」

眉間にしわを寄せ、こめかみに青い血管が浮かぶ。護は驚いて椅子から落ちてしまった。容疑者の脅しは何度も経験した。だがこの少年は異常な殺気がある。噛んでいた歯はやがてぎしぎしとした歯ぎしりにかわった。

「僕……僕は君の味方なんだ。君……はこれから少年審判を受けてもらうことになる……君だって冤罪……つまり間違っただ判断をされたら悔しいだろう？ だから、だからその君の本心や、その……事実を知りたいんだ」

「人間だれだって最後は死ぬんだ。遅い早いのことだけじゃねえか」

再び椅子に座りながら崇は言った。「あいつは死んで当然なんだよ」

「それは……どうということ？」崩れた体を起こしながら護は尋ねた。

「アイツ、股かけてやがった」

崇は唾を窓につばを吐き腕を組んだ。唾液はだらだらと窓を伝って垂れていく。ヤニのついた唾液が崇の顔に重なると光の屈折でひどく歪んで見えた。

男女関係のもつれの事件だが、根底には家族関係が絡んでいることは感じられる。そのような文面を弁護士会に報告した。おそらくあの少年は家裁に移送され少年鑑別所で取り調べられ「刑事裁判相当」で地方裁判所に起訴されるに違いない。あの少年の母親はあの年でキャバクラで働き生計を立てているくらいだから国選弁護人がつくことになるだろう。依頼が護に下ったなら断ろうと考えていた。これ以上弁護士としての評価が下がるのはまっぴらごめんだ、と言い逃れればいい。誰かが引き受けることになるから逃げるようで気が引ける。ただあのドスのきいた声。いろいろと接見に応じてきたがいかに怖い。負けたら殺される、そんな気さえする。あの調子だったら弁護方針さえ満足にたてられまい。

ただあの少年の顔がどうしても気になった。どこかで会ったのか？ 記憶を巡らせても思い浮かばない。ただ真っ暗な記憶の底で自分をあいたがっているように感じる。助けてくれ、と訴えかけているようにも思える。あんなに威圧するように振る舞っているが、自分を求めているようにも思える。ああ、いけない。いけない。

数日後。相変わらず手狭な屋根裏部屋のような弁護士事務所での生活を送っている。ソファの上で毛布をかぶり寝ているふりをする。仕事はない。日は昇り、日は沈む。古川真理亜はいつものように定時に現れ、定時に帰る。それからあの近藤崇という少年の面影を思い出す。自分には関係のない案件なのに、いつも考えてしまう。高校時代の……

「先生！」と真理亜はいきなり大声を發した。お茶をテーブルに差し出すと、向かいのソファに座った。護は無視していると、向かいのソファでギシギシ飛び跳ねる。そのうるささにかぶっていた毛布をまくり「うるさいなあ」と發して起きた。

「あ、やっば生きてましたね」真理亜はあっけらかんとして身を乗り出すと、護はうんざりしながら茶を飲んだ。

「あれを手にとってみたんですけど……」

「なに？」

「ほらあれです。なんとかシカってやつ」

真理亜は後ろを向いて書類棚わきから、民芸品を手にとって護に見せた。

「マトリョーシカ」

「そう、それです。面白いですね」

「なにが？」

「ほら人形を抜くと新しい顔の人形が出てきて、それをまた抜くとまた違う人形が出てきて、ず

とずっと抜いていたらしまいには空っぽだったってことを発見したんです」

真理亜は偉そうに胸を張った。バストのふくらみを自慢するように。

護は二日酔いのずきずきする頭痛に両手で頭を抱えながら顔をゆがめた。そんなこと知ってるって。君が発見したわけじゃない。

「知ってたよ」言葉が発するだけで額のあたりがどんよりと痛む。

「あ、そうですか。じゃあこのいっぱいの人形の顔は誰ですか」

黒田は解説していたが、とうに忘れた。

「え、知らないんですかあ」真理亜は勝ち誇った表情で指を折りながら、

「最初の顔はニコライ2世、二つめが、ウラジーミル・レーニン、ヨシフ・スターリン、ゲオルギー・マレンコフ、ニキータ・フルシチョフ、レオニード・ブレジネフ、ユーリ・アンドロポフ、コンスタンティン・チェルネンコ、最後はミハイル・ゴルバチョフ」

「随分詳しくだね」と半ばあきれながら聞いていた。どうせネットで調べたんだろうと高をくくっていた。

「すごいでしょ、まあ、全部ネットで調べたんですけどね。だけど最後がゴルバチョフっていう人で終わっているのが解せないんですよ。確か今の大統領は……」

「ドーミトリー・メドヴェージェフ」

「そうその人です、なんでないんですか？」

「黒田が行った時代がそいつだけだっただけさ」

真理亜は、ああなるほどといった表情になった。これくらい推測しろよ、と怒鳴ろうかと思ったが、ぐっと胸にとどめておいた。

「だけど、なんだか空しいですね。最後が空っぽなんて。玉ねぎの皮みたいで。むいて、むいて、むいて、むいていった拳句、最後が空っぽなんて」

真理亜の不意に言ったその言葉が妙に引っかかる。「最後は空っぽ」それが人生のエピローグのような重い響きに奏でているようで。「生きること」それは人はただひたすら働く奴隷だという真理を見透かしているようで。

「そうそう、さっき弁護士会から連絡がありました。以前接見した少年の国選弁護人を要請する、という内容でした。どうします？」

断る、という言葉がのどにつかえて出てこなかった。

「少し時間をくれて言っというて」

「はい、わかりました」と言うと、真理亜はふっと笑みを浮かべ、いつものヒールの音を響かせながら自分の机に戻っていった。

いつの間にか断れなくなっている。なぜだ？

それからの数週間は急に仕事が舞い込んで忙しくしていた。相続人の遺産配分や離婚調停、法律相談が主だったもので、もちろん護一人で仕事をこなしていた。真理亜は依頼人のお茶出しに翻弄され、自分の時間が減るなんて嫌だわ、とぼやいていた。結局護が関係した案件は三十件にまで達し、しめて五百万以上稼いだことになる。なんだか妙だな、と護は疑ってみたが、そんなことより妙に昂ぶって体が疼いた。その夜護は真理亜を抱いた。じゃぶじゃぶ湧き上がるアドレナリン。真理亜の甲高い声。汗がシャツに浸みつくほどいつになく濃厚なからみに没頭した。

「先生、よかったわ。いつもの若い男よりずっとやさしいし、ビリビリって電気ショックが全身に走っちゃいました」

護は髪をなで笑いながら、ここにいて先生はないだろ、と口元を緩めると、真理亜は護の胸に顔を寄せて目を閉じた。仰向けになって天井を見上げながらこの激しさはなんだろう、と思った。両手を頭の後ろで組み煙草をくわえながら考える。複雑な模様を描くように煙が宙にくゆっていた。こんな激しくプレイしたなんて何年振りだろう？ いや初めてだ。なぜならこのホテルで三回もプレイをしたのに、まだ女の体を求めているからだ。何人かの女とつきあってきたが、せいぜいに二回で体がくたくたになっていた。次はどういう体位でひーひー一言わせてやるか、今はそんなことばかり考えている。

強姦プレイ！

護はにやりと笑んだ。相手とは深い関係になっているわけで強姦罪にはならない。牛皮の鞭で引っ叩く、女は絶叫するかもしれない。その表情を護は見たくなかった。真理亜の顔にあの少年の顔が重なった。あの激怒した面。どこかで会ったような気がする。誰だろう？ また答えのない循環を鬱陶しく感じ頭をかきむしると、煙草を灰皿につぶした。真理亜を起こそうとすると、ベッドのわきに封の切ってある封筒が落ちていた。内ポケットに入れてあったものだ。すると今度は「あの男」の面が思い浮かぶ。仕事に没頭して忘れていたものが復活した。護の性欲はげんなりとしぼんでしまった。

それから相前後してぱったりと仕事が出来なくなった。あれは一体どういうことだろう？

「やっぱりあの依頼状のおかげですよ」

真理亜はそう言うと悪戯な目で護を覗きこんだ。

「なにが？」

「ほら『死刑を考える』とかいうフォーラムの出演依頼ですよ。あれに出演するのがいい宣伝になったんじゃないですか？」

「あれ？ あれは断れと言ったじゃないか」

真理亜は芝居丸出しの顔不思議そうな顔をして、「え～、先生はいつも犯人が喜ぶだけだって言ってたじゃないですか～」真理亜はトレーを胸で抱えながら、パンフレットを護に見せた。「私もそう思いますもん。投書もいっぱい来ていますよ。先生の発言が社会に受け入れられているなによりの証拠ですよ。いずれまた仕事も増えますよ、仕事が増えれば……」

護はその白黒のパンフレットを見た。「死刑を考える」と大きく見出しが付いていて、四人のパネリストがいた。一人は裁判官OB、現役とOBの二人の検事、そして自分が左端に出ていた。よく見ると二人の検事のうち一人は黒田だった。

「なんでもこのフォーラムはある代議士の肝いりで企画されたもので、死刑の存置を世論に訴えるのが目的だそうです。出来レースみたいなもんですよ。それでこんなにお金もらえるなら……」そして真理亜はあちこちゆっくりと歩きながら、

「こんなぼろ屋で儲からない仕事ばかりしてるんですもん、いつも現実に起きている仕事ぶりを言えばいいんですよ。簡単、簡単」

「断れ！ 単純な問題じゃないんだぞ！」

強い調子で言ってもうわの空のような顔を崩さず、おなかのあたりをぼんぼんと左手で叩き、さすっていた。護はその仕草を眺めた。直感が走った。

「じゃあ止めますう？ 仕事がなくなるだけですよお？ 二人の生活はどうするんですう？ あたしも子供が欲しいなあ〜」

真理亜は首を上下にちょちょこと振り、口をすぼませながら爪をいじくっていた。

「妊娠……？」護の背中に妙な汗をかいた。

「さあ、それはコウノトリさんに尋ねてみないとねえ、ね」

またおなかをぼんと軽く叩いて護に笑顔を振る舞う。女ってのはつくづく恐ろしい。

黒田に会ったのはその日の夕方で、今はなき新宿コマ劇場の近くの飲み屋だった。さっきの件でゆっくり飲める気分じゃなかったが。「なんだい、浮かないな」と黒田は現れた。

「まあいつものことだけど」と黒田は笑った。また一緒に飲んでしまう。黒田の紺色のスーツは筋肉でぱんぱんになっており、裂けるんじゃないかと思うほどだ。ネクタイは深い青色で斜めに黒の細かいラインが入っている。黒田は不機嫌そうにネクタイを緩めた。

「全く、くそ暑いな」

クールビズという習慣があったはずなのに、裁判に臨む時ネクタイがないと格好がつかないので、結局いつものように戻ってしまった。

「どうだい景気は」

「まあぼちぼちって所だな」護は答えると、犯罪で儲けるとは望ましくないな、と笑いながらビールジョッキを一気に飲み干した。空のジョッキを右手で持ち上げながら、左の人差し指を高く上げた。「あいよ〜」と店員の威勢のよい声が返ってきた。

「そっちはどう？」と黒田に尋ねると、

「最悪だよ」

と言いながら、「枝豆もう一つ」と声をあげて注文すると顔を護に向け、

「最近のガキはどうなってんだよ、全く」

「夜更けに帰宅途中の女をナイフで心臓に突き刺してそのまま逃げてやんの。まあ警官が警らしていたからよかった。すぐに現行犯逮捕だよ。だが被害者の女は出血死、そんな奴の調書が届いてな。尋問したわけさ」

護はふと思った。その時黒田のビールジョッキと枝豆が届いた。店員にサンキューと言葉をかけ、むしゃむしゃ食いながら、

「少年犯罪の厳罰化がようやく進んだのに全く効果が現れないな。二言目には『俺、未成年だぜ』とか偉そうに言い訳にしゃがって」

「なあ、そいつ近藤崇っていう少年じゃないのか」声を細めて尋ねると、

「ん、なんだ知ってたのか」と黒田は答えた。

「この間当番弁護で接見したんだ。まさかお前が担当するとは思わなかった」

「まあとにかく無茶苦茶だね。夜中まで徘徊する女子中学生とか、タバコを吸う高校生とか、このくらいなら可愛いほうさ。窃盗、強盗、婦女暴行、麻薬に、リンチに、売春まであっけらかんとしてるんだぜ。こんな連中の事件が、今この近くでも起こっているのだろうよ」護は頷いた。

二人とも同時にビールに口をつけ同時にジョッキをおろしそして黙りこんだ。急に居心地が悪

くなった。護は守秘義務に触れると感じた。多分黒田もそうなのだろう。

「なあ、やっぱり死刑は必要なのかな」ビールを一口飲んで護が緊張をほぐした。

「なかったらもっと凶悪な事件が増えるだけだよ。お前だってそう思うだろ」力なく護は頷いた。肩を落とした護に、

「国家の殺人がいいとか悪いとか、子供じみたこと考えてるのか？」

「いやそうじゃない」と即座に否定して、空いたジョッキを右手で上げビールを頼んだ。

「まだ気にしてるのか？」と黒田は言った。ああ、とまた元気がなく俯いてしまった。

「分からないではない。俺にも分かる。ただ俺は検察官だ。悪人を法廷に訴えるのが仕事だ。それと同じようにお前の残したしこりのようなものは、弁護士としての責任で相殺されるさ。どんなに凶悪な犯罪者でも弁護するのがお前の仕事だ。判決には賛否両論があったさ。だけどそれを裁くのは裁判官だ。お前が決める訳じゃない。お前はその弁護士としての義務を忠実に果たしたんだ」しばらくの間ができた。黒田は遠くから理解してくれている。ありがたかった。

「もう少し飲むか」と黒田は立ち上がった。護は頷き、残りのビールを飲み干した。

黒田や護の学生時代当時はバブル経済全盛期で、六本木のマハラジャや芝浦ウォーターフロントのジュリアナ東京などのディスコで、女はボディラインを強調するボディコンという服装と長めの髪を揃えるワンレングスカットといういでたちでお立ち台の上で扇子を振りながら、そのまわりを男はアルマーニのスーツにどぎつい黄色や赤のネクタイを締め金のじゃらじゃらした飾り物をまとって、何万人もの若者がテクノサウンドで踊り狂っていた。受験戦争で勉強は終わり、大学で勉強するなんていうのは誰もいなかった。金のない地方出身の大学生はださい感じで馬鹿にされた。そんな風潮の若者を評論家はなんとなく訝しく見ていた。当時の最大の問題は、汚職まみれの政治家を一掃するため選挙制度を変えようという一連の政争劇だったが、それを善導すべき青年の体たらくぶりを打破する気概がないと談じて馬鹿にしていたのだ。そんな中、駒場キャンパスで「汚職政治家を追放せよ！」とベニヤ板にペンキで大きな文字を書き、メガフォンを持って叫び続けていたのが黒田だった。それを学生たちは遠目で見て通り過ぎていく。護はしばらくその様子を眺めていた。怒鳴っている黒田に護は数メートルおいて座り込んで眺めていた。するとその熱気が護にも伝わってきて、気がつくやうに護も同じような言葉を連呼していた。なんとなく同じように考えている学生たちにじわじわと伝染して、気づくと結構な数になった。だがそれでも世論の壁を突き動かすような運動までにはならず、次々と続く政治家汚職よりも酩酊状態となった世情に呑み込まれ、遊び狂うかテレビゲームをコタツに入りながら楽しむという、またぼんやりとした学生ばかりになってしまった。そんな中突然黒田は、

「俺はモスクワに行く」

と言い出した。当時は「冷戦」真っ只中だが「それでも俺は行く」と空を見上げ叫んだ。それは使命感を背負った堂々としたものだった。成田空港で見送りしばしの別れを告げると、黒田は単身モスクワに向かった。

ゴルバチョフがソヴィエト共産党の書記長に就任するとその豪腕で古い人間を次々に解任し若手を起用する抜擢人事を断行し、古いソヴィエトの伝統を次々に改革していく。結果的にそれが東欧諸国を離反させ、さらにはソヴィエト連邦をも崩壊させたのだとしても、黒田や護は高校時代にテレビで目撃した一連の「ペレストロイカ」に強い共感を抱いていた。「冷戦」も雪解けの

時代に進もうとしていた世界情勢ではあったが、護にはソヴィエトに行く勇気などなかった。後でどういう伝手があったのか聞いてみたら、「ロシア文学の研究のため」という文句をひねり出し、親や大学の了解を得たらしい。

帰国後、これからの身の振り方をどうするかという時になって黒田は、「政治改革には司法が政治家を縛る必要がある」と、司法試験に没入していくことになる。「法を作る官僚になればいいじゃないか」と護は言う、「官僚の上に立つ政治家が、その手を縛るような法案なんて却下するだけだ」なるほど、と思った護だったが、護自身はなんとなく学生時代を延長できるかのように考えて、それにならうように司法試験の合格を目指すことになった。黒田は在学中に合格したが、護は三回棒に振って四度目ようやく合格した。黒田は司法権の独立を獲得してこの国の法秩序を保つ裁判官を目指していたのだが、裁判官採用試験で落ちてしまう。黒田は多少趣が違いますが毅然とした汚職政治家の捜査に共感を覚えたこともあって、検事になろうとしてその試験には合格する。しかしここから次第に理想から外れていく。

清廉潔白を自負として持ちながらも、泥臭い事件に回されることになる。自分の限界を感じ始めるようになった。黒田が希望していた特捜部に配属されるようなことはなかった。どうやら単身ソヴィエトに行ってしまったことで公安に目をつけられてしまったらしい。それでも地検の刑事部に所属し、それなりに仕事はこなしている。立派なものだと護は思う。それでも黒田にとっては不服らしい。この頃ははかどらない憂さを晴らすのに、同じように仕事の来ない護を利用して大酒を飲むような日も徐々に多くなっている。

死刑の存置について「死刑は存置されるべき」という黒田と護の意見は一致している。この日本で、国家が人を殺すのは憲法の基本権を逸脱している、という評論家がいる。というなら一回でいいから現場で働いてみる、と言いたくなる。

「誰でもいいから殺したかった」、「死刑になりたいから殺した」、「よがってたんだから強姦じゃなくて和姦じゃねえ？」などという一瞬言葉が詰まるほどの開き直りの論理が横行して、それが「自由」だと言ってはばからない。そんな奴らが、この今、この一瞬の間にもいる。こんな奴らの取り調べは苦痛だ。こんな奴らに基本権など剥奪してしまえばいい、とまで怒りが爆発することもある。しかしそんなことをしたらクビになって無報酬。弁護士には忍耐が必要なのだ。

「代わりに終身刑を最高刑にしたらどうか」という識者もいる。

これにも黒田も護も意見は一致している。「刑務所で養ってもらうために殺しをした」などという供述が出るに決まっている。そうして監獄で生活補助をするという理不尽なことになってしまう。

「罪の意識のないものに、どんな刑を与えても意味をなさない」

と黒田は言った。確か『罪と罰』の解説だった。護は感情では諸手に賛同するのに、いざ自分に回ってくると理知的に優しくしてしまう。だが……

「だが？」

上機嫌の黒田は若い女を両腕に抱え、脇の下から手を伸ばして胸を揉んでいる。およそ検事と

は思えない遊び屋だと護は呆れながらも、黒田は言った。

「だから何度も言ってるだろ、お前の責任感は十分に分かっているって。ただ弁護士としての責任感の問題を拡大解釈して一般論と結びつけているだけなんだって」

確かにそうなのかも知れない、いやそうなのだ。しかし……

終電近くの時刻には冷たい風が吹いていた。店を後にすると横に並んで黙りこんで歩いた。黒田は陽気だがもう酔いがさめたらしい。黒田検事は相変わらず豪快だ。だが今は黙ってコツコツと踵で地をけている。しっかりとした足どりが護の耳に届いていた。黒田は突然歩みを止めた。

「あの事件。国選弁護人がつくらしい。あの少年の弁護人にならないよな？」

「いや、まだ決めてない。弁護士会の依頼は断ってもいいんだけど、なにか腑に落ちないところがあってさ、決めかねているんだ」

黒田は急に嗅覚鋭い表情になった。急に黒田はあちこち見渡ししながら頭を近づけ、

「それは止めた方がいい、だってお前……」

とそこで黒田の声は途切れた。なんだ？ と護は尋ねた。黒田は答えない。作り笑いで言い訳を考えているのがよく分かる。再び歩き出すと、

「早川恵理子、覚えてるか？」黒田からいきなり尋ねられた。

「ん？ ああ忘れたわけじゃない。まあまさかプラハに行っちゃったとはな。いいところのお嬢様だし、まあ彼女なら温かい家庭生活を送っているんじゃないか」

「なぜそう思う」また歩みを止める。黒田はしまった、という険しい表情になった。

「なんだ？ 彼女になにかあったのか」護が尋ねると、

「……いや、なんでもない」と黙り込む。するとまた強引に話題を変え、

「そうそう、お前離婚していたよな？」続けて「どうなんだ、再婚する気はあるのか？」

「ん？ まあしばらくは独身貴族だろうよ」

そうか、と手短かに言った。ごまかすように黒田は笑っていた。黒田は言いよどんでいるように思えた。しかし追求するのもはばかれた。

そろそろ行かなきゃ終電が行っちゃう、と黒田は言った。護は慌てて小走りした。新宿駅に着くと、なあ、と大声で呼び止めた。

「とにかくその今回の件、弁護の依頼は断ってくれ、頼む」黒田は手を合わせていた。続けて「……親友が相手だと感情に引っ張られるような気がするんだ、わかるだろ」とはにかんだ表情を見せた。護はふっと笑みながら軽く頷いた。そして黒田は京王線の方へ向かう。学生時代の黒田の豪放磊落ぶりについていけないくらいだったのが、なぜかがっくりしているように見えた。公人が私情をはさむのは確かにまずい。しかし黒田には他に理由があるような気がする。なぜかそんな気がした。気になったが、そのまま護は小田急線の方へ足を向けた。

「はい、ちょうどここが午後十時頃帰宅途中の松本梨加さんが乱暴され心臓を刺し殺されていた現場です……」

そこはアスファルトの色が変色していてブラシでゴシゴシ洗浄した後のようだった。

「ああ、まだ血痕が残っているのでしょうかねえ」とスタジオ内で改めて確認するような言葉を司会者が発した。

女性のレポーターは小走りにその道を真っ直ぐに進んだ。そして体を横にしないと進めない路地を指さした。

「犯人の少年はこの道、この狭い路地を通して逃げたものと思われます」

そしてレポーターはカメラの正面に立ち、

「この先の突き当たりで、たまたまパトロール中の警官に声を掛けられ現行犯逮捕されたということです」

被害者の自宅アパート近くの人にマイクを向ける映像に切り替わる。

「殺された梨加さんはどういう方でした？」

「ええ、あまり顔を見たことがないんです。でも私、いつも朝七時前に朝食の準備していた時に走っていくのを見ていたんですよ。いつも出勤が早いみたいで。夜遅くまで働いていたんじゃないかしら」

「それで？」

「……午後十時くらい女性の悲鳴を聞いたので外に出たんです。そうしたらなにか殴っているような光景に出会いまして、大声で叫んだら逃げていったんです」続けて「それで駆けつけたら一面血だらけで、もう慌てて救急車に通報したんですよ」

「じゃあたまたまいたから殺されたということも……」

「あると思いますよ。近所で恨むような人はいませんもの」

「……このように松本梨加さんは、理不尽で残酷な行為をうけた可能性も出ています」

レポーターと目撃者の後ろ姿のツーショットをふんだんに放送していた。毎日毎日よく飽きないなあ、と護は笑んだ。真理亜はチャンネルを何度も変え呆れるほど食入るようにニュースショーを見ている。護はふと手元にあった調書をもう一度読み直した。

「……神奈川県横浜市S区……？」しばらく眼を滑らせていくと、「ああ」と護は言った。

「間違いない、この事件のことだ」書類を指で叩くと真理亜はびっくりしたようで、

「ええ！ そうなんですか！」

と真理亜は口を押さえていた右手で調書を奪い取り、早速情報収集し始めた。

「どうせ地裁に逆送されるだろうって思ったから大して調べなかったんだ。そうか、この事件だったのか。マスコミもネタ切れだな、こんな古い事件で操られているなんて」

「ちょっと！」真理亜はきつと睨んだ。

「なんでちゃんと調べないんです。一步間違えば先生が殺されていたかもしれないのに」

まさか興味本位のゴシップを探しているわけじゃないよな、と思いながらも、

「ああ、まあぼんやりしていたとしか言えないな。申し訳ない、と言っても遅いか」

「被疑者氏名、近藤崇、年齢十七。保護者氏名、近藤恵理子、年齢三十四」

近藤という姓は知らないが、保護者が自分と同一年だった。恵理子という名前にも思い出がある。高校時代の同級生だ。遠い、遠い遠い世界で二人は出会った。これが運命というやつだ、と思わせる感情が渦巻いていた。しかし本当に運命的な出会いは、ロミオとジュリエットのように成就しないものだ。恵理子の父親は外交官と一緒にチェコのプラハへ行ってしまった。

あの少年の輪郭や大きな瞳ときりっとした鼻筋、ふっくらとした唇。

ふと黒田のあの表情を思い出した。

(……国選弁護の依頼は断ってくれ、頼む)

似合わない丁重な言い回しだった。しかも合掌してまで。軽い冗談だと思ったが、そうではないとしたらどうだろう。なぜあんなにしてまで頼むのか。そうだ、恵理子の話から黒田は急に妙な具合になっていた。恵理子とはまさか……

「被告を……」「処する……」「被告を……」「被告を……」「……処する……」

「被告を……死刑に……」

「被告を死刑に処する」

がっと起きた時まだ周りは暗かった。酷い空咳が止まらない。枕元に置いてある水差しを手でつかみがぶがぶ飲み込むと、何度か咳をした後治まった。恐ろしくもうとうしいような静けさだ。真理亜もいない。大声を上げた。誰もいないのを証明するかのように室内に反響するだけだ。

なぜ間違いを主張しなかった！ 頭を抱えた。ただ言い訳のように逃げているだけだ。

胸元からなにかが落ちた。あの手紙。「あの男」の手紙だ。護は唸った。「あの男」の、あの不敵な笑いを思い出さないわけにはいかない。もう明け方で青白い透明な空気がこの事務所を満たしていく。護はぼんやりと陽が差してくるのを待った。

「えー、昨今の凶悪事件を防止するのにどのような施策が必要なのか、私はそこを問いたいと思いました。少子高齢化社会を迎えるこの時にあって、犯罪の凶悪化は目に余るものがあります。裁判員制度が施行されてから、市民の司法参加が進みました。しかしながら、凶悪犯の事件にあっても、死刑を選択する裁判員は二の足を踏んでいるように感じます。その結果無期懲役の判決にとどまり、十年ほどの刑期を終えるとまた社会へ戻ってくるのです。終身刑を最高刑にしようとする意見が多く寄せられています……」

長々と代議士の演説は続く。護は壇上の一番右端に座っている。その左にOBの検察官と黒田が座っている。そのまた左に裁判官のOBがおり、司会進行役がいて、名前も知らない代議士が舞台中央で挨拶に立っている。しばらくぼんやりと見ていたが、護にはなんとも言えない重圧感があった。死刑存廃をどうするか。勿論日常の仕事をしている時は死刑存置の立場につくのだが、本当の頭の中ではごちゃごちゃとこんがらがっている。

代議士のプロパガンダということが念頭にある、というようなことを真理亜は言っていた。つまりこの壇上にいる者すべて、あるいは大多数の観覧者は死刑の存置を望んでいて、そしてその奥にあるテレビカメラに向かって自分をアピールしている、ということだ。わはは、と笑いが漏

れていた。なにか気のいいことをしゃべったらしい。

護は黒田に目配せをした。しかし黒田は応じようとはしなかった。机上のグラスの端を指先でちん、と高い音をならすと、判事と検事のOBの二人はふらりとこちらに目線が来たが、黒田はぴくりともしなかった。相変わらず黙ったまま声が大きく響くような天井を祈るように仰いだり、俯いて手相見のように自分の掌を見たりしていた。その掌にはハンカチがあって、ぎっちり握ったり緩めたりしていた。なにかを隠しているようにも、していないようにもとれる奇妙な行動だった。しかしあれから何度も黒田に連絡を取ろうとしたのに取れずにいる。なにかを隠しているに違いない。

「……というわけで私は裁判官という職責を果たすため、極刑を下したのであります。裁判官である以前に、自分は人間です。私が人を殺すのだ、そんなことが頭をよぎります。でも法に則っている以上私は呟くように判決文をこう朗読するわけです。『主文、被告に死刑を処する』と。純粋な正義感を躊躇させてしまうのです。誠に不甲斐ないと全く情けなく思うのですが……」

そうして判事OBのスピーチが終わった。降壇すると拍手が起こった。次に壇上に上がったのは検事のOBの男だった。登壇する時に拍手がなった。そいつが「トマス・ホップズは……」と言い出した瞬間、護はもう結論が分かっただけでうんざりしてしまった。次第に客席も虚ろな人が多くなった。寝ている人もいる。

トマス・ホップズは「本来人間は自由だ」と説く。これが自然権というやつで、生きているために普通に万民に保障される権利である。殺しもありだ、とまで言い切ってしまう恐ろしい権利なのだ。そういう権利を無条件に認めていくといずれ他人と激突する。そうしたら戦いが起きてしまうのではないか。それが「万人の万人に対する闘争」とよばれるもので、そこで人間は自然権の一部を譲渡して社会契約を結ぶ……などという発言を延々と繰り返す。まるで大学の講義だ。いささか護も眠くなってしまうその法理論をその男は述べ立て、社会契約を破った犯罪者にはそれなりの刑罰として死刑は必要である、と結論づけた。次に登壇したのは黒田だった。

「私は目の前で犯人を取り逃がしてしまいました。敗訴です。その時の被告は判決を聞いて再び腰を下ろすと飄々として面倒くさそうに貧乏揺すりさえしていました。被告は十九歳の少年で強姦殺人罪で起訴したのです。証拠もそろっていました。しかし結果は無罪でした。私は思わず立ち上がってしまいました。その時の判決文を真っ白な言葉の羅列が流れていきました。被告を席から見上げてすぐ後ろで見守っている被害者家族の顔を見ました。まるで不甲斐ない自分を呪っているように見えました。そうです、私は被害者家族にとっては犯罪者なのです」

会場の空気が変わった。緊張感のきりりとした肌を刺す冷気が漂い、目を覚まして黒田の今まさに直面している問題を提示し会場のものが食入るように見つめている。

「少年法の規定に従い、家庭裁判所で刑事罰を加えるべく詳細に検討した結果、地裁送致の上死刑求刑しかないだろう、とまとまりました。その被告は……」

話を聞いているうちに護の脳が次々に覚醒し、それが正義だ、そうだそれが正義なんだ！ と興奮しだした。すると、

「被告を……」「処する……」

蘇る。「あの男」が。「あの男」が！

「被告を……死刑に……」

しないでくれ、してはならない！　しばらくすると護は悪寒を感じ、体ががたがた震えだした。両腕を組んで体を縛り上げた。それでも寒気は止まらない。なんだ、なんだ、なんで俺がここにいるんだ。死刑を肯定するなら、「あの男」の場合はどうなんだ？　黒田の弁舌はいつの間にか終わっていた。護はゆっくり登壇したがしばらく声がでなかった。ただ黙って自分の掌を見た。がたがたと震えている。「ああ！」と思わず叫び、同時に走り出した。壇上を降り、出入口へ走っていった。ざわついている会場。あっけにとられている出演者。そんなの関係ない。そうだ、自分にはこんな討論会に出る資格などないのだ。胸に熱を感じた。

熱い、心臓のあたりが猛烈に熱い。そして鼓動が大きく、早くなる。どんどん上がる。ありえない、あってはならない。ただの窃盗事件で死刑だなんて。

.....ゆっくりこつこつと固い足音を立てながら階段を上る。先導する刑務官がドアを開ける。二人の刑務官が後ろ手をしっかりとつかみ、逃げられないようにする。室内の左側には全面ガラス張りの部屋があり、四人の男が見つめている。男はゆっくりと進む。黄色いアコーディオンカーテンが開かれ、そこへ通された。そこには大きな仏画があり、その手前にはお香がたかかっていた。「なにか言い残したいことはあるか」と刑務官は尋ねる。いえありませんと男は応じる。すると間もなく後ろ手に手錠をかけられ目隠しをされた。また歩かされる。十数歩歩かされたところで足音が消えた。どこかの坊さんが経を唱えている。首の回りに荒縄のいかにもちくちくとしたロープが結ばれていく。階下からは話し声が聞こえる。間もなくこの足下の床が開く。首が絞まり、息絶えるまでぶらさがらるのだ。ガタツという音を聴く。うめき声とともに護は目を閉じた。ぎしぎし体を揺するロープの軋み。目をゆっくりと開けるとぶら下がって首を上下に振っていた。逃れようと唸っているのだ。ごぼごぼと泡を噴くような嗚咽。息が吸えないのだ。何とか呼吸する隙間を作ろうとして口を開けるが無駄だ。ますますロープはきつくなる。やがて力の抜けた肉体が首を真上に上げてぶらんぶらんと揺れていた。筋肉が弛緩し尿がしたしたと垂れている。刑務官は死体を下ろし絶命した時刻を読み上げる。「十一時二分」

護は国道四号線を北に向かって走る。荒川を渡ると東に向きを変え荒川沿いを走った。こんなに走れる体力がある自分に驚いていた。護は死刑を知っている。間近に見た光景を。あの迫り来るあの顔面を。合法的処断のおぞましさを。「あの男」はなぜ死を選択したんだ？　なぜまた見届けねばならないのか？　冗談じゃない！　なんだって俺は死刑判決ばかり当たっちゃうんだ。川沿いからまた向きを変えて、細い路地を左右に折れた。着いた先の正門前に「東京拘置所」と大きく書かれてある。背広から封筒を取り出した。それはまだ熱い熱を帯びていた。封筒の中の手紙をとりだす。

「今一度お目にかかりたし」

筆圧の濃い大きな文字でただそれだけ書かれている。護は額の暑い汗を拭い、一度咳払いをして中に入っていった。もう一生会わないと誓った「あの男」に会うために。

角田浩一はある煌びやかな満月の夜に逮捕された。浩一はどこかの橋げたに捨てたらしい黒い学生服を見つけてそれを着ていた（と証言していた）。肩のあたりにはふけにまみれ、垢だらけで首のあたりが焦げたように赤茶けている。べとべとした髪や髭がのび放題になっている。この姿でこの冬を乗り切った。陽の眩い夏になってもその格好や生活は変わらない。だがまわりの人は掌で鼻を押さえている。たぶん酷い体臭が漂っているのだろう。そんなことは分かっている。だが好きでこんな生活をしているわけではない。浩一は両親を呪っていた。こんな生活を始めたのも、一家が離散してしまったからだ。父親の博打癖で家出をしたことと母親の不倫がこういう生活を送るようになった理由だ。

この冬は色々と残飯を食うことができた。しかし夏は食中毒を防ぐためそのまま生ゴミとして捨てず、店内で特別に管理して処分するので手に入らなくなっている。この年の夏は暑かった。じとじとと首や背中から汗が噴き出している。それで日差しを避けて風の通る川の畔にブルーシートを張ってすみかにしていた。昼間は体力の消耗を避けるため、そこの寝床で我慢して寝ていた。

浩一は昨日からなにも食べていない。コンビニやスーパーで残飯を探した。そして家庭ゴミの収集所をあさりすえた臭いを嗅ぎながら探した。果物とかの皮だけでもいいのに。自販機のまわりに金が落ちていないかと釣り銭箱を何遍も指で探す。公園の水を飲んで気を紛らわす。それでも腹が減ってどうしようもない。腹をさすりながら仰向けに寝た。

ついに浩一は決意した。スーパーの食べ物を盗むのだ、と。どこをあさるかは入念に調べた。防犯カメラが少ない店を探した。その店舗に入って死角となっている場所を探る。それは意外と簡単にできた。九十円のカップ麺一つと缶詰を二個ポケットに入れた。そのまま店を出る。鼓動はばくばくとしていた。怪しい身なりなので見つかるかも知れない。そんなことを考えたりした。しかし人をカメラの盾にして歩いた。なぜこんな浅ましいまねをしなければならないのか。呪いの言葉を吐く。しかしあっさり盗めてしまった。乾いたままのカップ麺をばりばりと食っていた時、突然ブルーシートを捲られた。警察官が自分をつけていたのだ。浩一は観念した。なんだか白い紙を見せられ無理矢理立たされた。やたら背の高い警察官だった。見下ろして言う。

「角田浩一だな、お前を殺人罪で逮捕する」

「ああ……」と言うなり食べ物落とし、泣いた。そして頭をゆっくりともたげ抵抗せずに手錠をかけられた、という。

間もなく護が接見にやってきた。この時護は不自然さを感じていた。

「被害者の服にあなたと同じ血液——これはDNA鑑定で分かっています——が確認されました」浩一は小刻みに頷いていた。

「そうです、全部私がしたのです」顔を真正面に持ち上げて、やや大げさな顔つきで浩一は言った。護は続けて尋ねた。

「あなたには双子の弟さんがいますね」

浩一は表情がびたりと固まった。呼吸が止まったかのように。護は続けた。

「あなたはその弟さんと同じDNAを持っている。弟さんの犯行の可能性もありますね」

「私がした、これは私の罪なのです！」と浩一は語気を強め一步も引き下がらない。

「角田さん、なぜ嘘をつくんです。真実を法廷で立証すべきでしょう？」

それでも本当に……と浩一の長い空白の後、本当に私がやったんだ！ と大声を張り上げて窓を叩いた。すぐ刑務官が現れ浩一を捕まえる。護は手を挙げて手を離すように、と言った。浩一はまたパイプ椅子に座らせられた。

「被害者の田村文夫さん、妻の真弓さん、三歳で長女の悠さん、そして目撃者の同僚の男、被害者も目撃者も一切あなたと関わりがない。弟さんはこの町工場で働いていますね？ つまり弟さんは事件と接点がある」護は続けた。「兄弟愛はわかりますがね……」

「かばってなんかいませんよ」浩一は続けた。「私がしたんですよ、弁護士さん」

護は浩一の瞳の虹彩がひどく震えているのを見つめるしかなかった。

そんな遣り取りが数ヶ月続いた。夫婦二人と幼い娘を殺害したこの事件をどうしても自分の罪なのだと言主張し続ける角田浩一は、大衆を感情的に煽るようにして、「幼い女の子にイタズラした」だの「その母親といい関係になろうとした」だのとリークし、殺したのは兄の浩一なのではないか、というスキャンダルがテレビや週刊誌に踊った。護の事務所にもテレビカメラや大勢の新聞記者などが押しかけてきて、凶悪犯をかばうとはないごときだ、と執拗に邪魔した。その後荒川で弟の死体が発見された。護が真犯人だと考えていた弟が死んでしまった。真犯人は弟かも知れないという記事も掲載されたが、兄の浩一を怪しむ風当たりも強くなった。護は諦めて情状の酌量を求める戦術に切り替えたが、それは事実の隠蔽だという火に油を注ぐ結果となった。判決は、検察側の主張を全面的に認め、三人の命を奪った事実は重いという理由のもと、求刑通り「死刑」が言い渡された。護は控訴を勧めたが、頑として受け付けなかった。

拘置所の接見室で二人は対面した。あの時と同じように。

浩一はグレーの作業着を着ていた。髪の毛は少し禿げあがっているだろうか。しかしすっきりとカットされていて、以前のような油髪の汚らしい格好はなくなっていた。少し白髪が増えているようだが、それほど年をとっているようには見えない。なによりもあの不調法な表情が消え、例えていうなら悟りを得た僧侶のような清明とした顔つきをしている。

浩一はゆっくりとパイプ椅子に歩み寄り深く腰を下ろして座った。

護の手にはこの手紙を、——角田浩一その人が書いた手紙を——面前のガラスに貼り付け言葉を発した。

「なぜです？ なぜあなたは正直に自供しなかった！ あなたの罪状は窃盗のみだったはずだ！」護はほとんど涙声で詰め寄った。

「私が殺したんですよ」浩一は達観したような顔つきで静かにそう答えた。興奮している護の言葉を遮って、

「あいつは私よりずっと成績がよかった。同じDNAを持っているのにね。将来は弁護士になるのだと言っていました。一家離散となって結局それを叶えてやれなかった」

その言葉に護は黙り込んでしまった。護は言葉が続かない。

「弁護士さん、わしらは一ヶ月三千元で暮らしているんですよ。これだけの収入でどんな生活が

できるんです？ 弟は確かに殺した。私の供述は嘘だ。しかし弟は本当に純粋な気持ちで弁護士になって私に楽をさせてやりたいと思っていたのですよ」浩一はぐっと目に力を込めて、

「あの晩弟が私のブルーシートに駆け込んできたんです。全身血まみれでね。そしてこう言った、『兄さん、人を殺してしまいました。本当にすまない』とね、私は咄嗟に弟の学ランを剥ぎ自分の服と取り替えました。弟は手に傷を負っていた。そこで私も同じところに傷を作り、そして逃がしてやった。これで弟は助かるはずだったんです」顔を正面に向けた。

「結局弟は自殺した。でも恨みは残ります」「社会ってやつにね」

浩一は不敵な笑みを浮かべていた。

「恨みは誰かが背負わねばならないんです。私もあなたも」

「私も？」護は裏返った声を発した。浩一は笑みを浮かべた。死刑囚として閉じこめられていながら、なにかを企んでいるような。邪な計算をしているような。

「あなたは少年事件の弁護人なると聞きました。本当ですか？」

そんなことを誰から聞いたのだろうか。事件はともかく、弁護を頼まれているとかいないとかのような陳腐な情報を。

「塀の中では色々と人脈ができるものでね」

こちらの心を見透かしているようで、護は胸をつかれた。

「いや、その、まだ正式には決めていませんが」護の昂ぶる感情は冷や水を浴びせられたように脱力し、背筋に陰気な汗が伝う。

「是非お引き受けなさい」しばらくの沈黙の後、俯きがちの護に浩一は、

「逃げる気ですか？」護はきつい視線をうけた。心臓は血が噴き出すように鳴り響く。

「あなたは私のことで臆病になっている」浩一は続けた。「それでは人を救うことなんてできませんよ」

「あなたが臆病にさせたんだ！」護は叫ぶ。

「弁護士の私に嘘をついたんだぞ！ あれからずっと自分の正義に向き合えないんだ！」

「やはりあなたは世間に褒められる仕事だけしたいのですね」「責任も自覚せずに」

浩一は終始冷静で、

「絶対にあなたが弁護するべきだ。あなたはその少年の家族を更生させる義務がある」

「更生させる義務」護は頭を抱えた。するとなにかを感じた。見上げると青い光が差していた。波を打っているオーロラのような光の帯だ。護は椅子から落ちてしまった。しかしその神秘的な光を、口を開けばなしにして恍惚と見上げていた。

「角田浩一、時間だ」刑務官の声が響き、

「私はもうお終いです。最後に会えて本当によかった」浩一は口を曲げてにやりと笑った。

護は冷たい部屋に残された。その時鼻から清々しい風が凧がれた。そうだただ己の信念に従うまでだ。それはあの少年を「更生させる」ことだ。

護は事務所に戻った。ドアを開けると真理亜はすまして受付の椅子に腰掛けている。

「古川君、松本梨加の事件で逮捕された少年の調書を取ってきてくれないか？」

「もう持ってきました」

え？

真理亜は腰をかがめてぎっしりファイルが詰まった大きな段ボール箱を机に載せた。

「どうしてこれを？」と護が尋ねると、

「だって先生はきっぱりと断らなかったじゃないですか、絶対引受けるって思ったんですよ」口に手を添えはにかんだ笑みを浮かべ、

「先生はやっぱり金にならない仕事ばかりするんですね。全く貧乏性というか」

真理亜は俯きながら、「でもいいですよね……そういう人、私は好きですよ」

真理亜が微笑んでいるのを横目に見ながら、護は照れ隠ししてその段ボール箱をベッドがわりのソファに放り投げた。すると携帯電話の振動がした。画面を見ると黒田啓一と表示されていた。護は一度背広を払ってから電話に出た。この間はどうも、という紛れもない黒田の声が電話に響いていた。

「ちょっと聞いたんだけど。あの松本梨加殺人の事件、お前が担当弁護士になったって聞いて。まさかお前引き受けてないよな？」

「引き受けたよ」しばらくの沈黙があった。ため息が洩れた。

「なんで引き受けたんだよ。断れって言ったじゃないか」

「そうはいかないよ。誰かが引き受けなきゃならないわけだから」

荒く吐く息の音が受話器から伝わってくる。護はあの不機嫌そうな黒田の表情を思い起こした。そのたぎるような勢いを制止するように護が冷静に尋ねた。

「近藤恵理子の旧姓は早川じゃないのか？」

すると重苦しい低い声で、ああ、と認めた。

「そうか」護は淡々と言った。

「まさかお前、早川を守るために……」

「もう二十年以上も前のことだぞ。疑っているのか」沈黙があった。

「普通はない」すると一段と声を荒げ「だが俺はお前の過去を知っているんだぞ」

また沈黙があった。（過去？ 過去ってなんだ？）

「俺はな、検察官だ。正義を守るために犯人を検挙するのが仕事だ」

「俺は弁護士だ。少年を弁護し、更生させる義務がある」

また間が空いた。黒田は唾を飛ばすような勢いで、

「公判では画期的な捜査資料を提出する。諦めろ、俺はお前を責めたくない」

「これ以上の通話は守秘義務に抵触するぞ」

「……正気か？ そうか、本当に争う気なんだな。俺はな、躊躇しないからな！」

ああ、と護が応じる前に電話が切れた。

拘置所でまたあの少年に接見する。向こう側のドアが開いて近藤崇が現れた。護は軽く立ち上がって首を傾げ、

「二回目になるかな、君の弁護を担当することになった国選弁護人の加納護です」そして軽く一礼した。

崇は黙ってパイプ椅子に腰掛けた。「なあ」

「なあ、俺もうここから出たいんだよ。ここの連中うるせえんだよ。頼むよ、俺なんて言えбайいのさ？」

最初に出会った時とはうってかわり、鬱陶しさ丸出しのひ弱な声だ。

「君が真実を話すことから始まります」護は視線を書類に落とした。

「本年七月十一日午後十時ごろ神奈川県横浜市S区において、少年近藤崇は帰宅途中の被害者松本梨加に対して、衣服をはぎ取って強姦した挙句、持っていたナイフで心臓を突刺し出血性ショックで死に至らしめ逃走した」護は続けて、

「これも二回目になるけど、事実ですか？」

「もういいよ、なんでもいいからここから出られる方法はないのかよ」

「まず刑事裁判で争うことが決まりました。君が敗訴した場合数年刑務所に入ることになります。正直に話し反省の弁を垂れるなら、情状酌量といって刑を軽減されますが」

「俺、未成年だぜ」

「しかし刑事責任が認められました。あなたは刑事事件で起訴されることになります」

護は少年の目を見ていた。ふてくされたこの表情の中にもあのソーニャのような女の血が流れているのだ。正直に反省して欲しい。

貧乏ゆすりなのか、体が震えている。落ち着かない様子だった。瞬間体を乗り出して顔を窓に押し付けた。

「おい！ ふざけるなよ。ここから出すのがお前の仕事じゃねえか」

「ではこの松本梨加さんを殺したんですね」

「殺してねえよ。そんなこと言えるかよ」

「では示されているナイフはどうですか？」

「そんなの誰のだっていいじゃねえか」

「いえ、そうは言えませんよ。あなたのものでなければ殺人罪の摘要が外れることになります」すると崇はふっと穏やかな表情になり、目を見開き身を乗り出して、

「じゃあ俺のじゃねえよ」崇は言った。

「じゃあこのナイフについての指紋は？」

崇は唾を吐き、どしんと椅子に腰を落とすと、

「けっ、さっきの取り調べと同じ展開だな」続けて、

「あんたさ、俺を助ける気あんの？」

「ではなぜ暴行したのですか」娑婆に出すことが助けることではない。

「気持ちいいからだよ。あいつだってよがっていい声出してたぜ。それを俺は満たしてやっただけさ。あの世でお礼しているぜ、きっと」崇は笑いながら椅子に浅く座りなおした。

「近藤崇、時間だ」刑務官は言った。はいはい、と言いながら崇は腰を上げ、また唾を護に吐いた。同じくそれはだらだらとガラスを伝って垂れていく。護はきつく拳を握った。

翌日、護は近藤恵理子のもとを訪ねた。小田急線の後ろの車両に座った。相模大野で切り離し江ノ島線に切り替わる。終点の片瀬江ノ島駅で降りた。駅を出て海沿いを歩いた。昨日は真夏だというのに、今日は鬱陶しいほどの雲が覆い海風が冷たい。砂浜にもポツリポツリとしたサーファーが波乗りしている以外誰もいない。出店のじいさんがいた。麦わら帽子をかぶり空をずっと見上げていた。どうしようもない、そんな空気を護は読みとった。しばらく歩くと小学校がある。角を右側に入り、一戸建ての家をいくつか抜けていくと、彼女のいるアパートに着いた。呼び鈴を押すのに多少たじろいだ。一つ深呼吸をついてから押した。

誰もいない。もう一呼吸置き再度押す。か細いセミの鳴き声が余計に静けさを誘う。

「どなたですか？」

聞き覚えのある声がして顔を向けると、買い物袋を持った女がいた。輪郭が重なる。

「国選弁護人です」

護は恵理子に向かって言うと恵理子は慌ててかけより鍵を開けた。二十年前の恵理子より少しやつれている感じがした。疲労感が漂っており快活な様子は窺えなかったが、大きな瞳ときりっと通した鼻筋、ふっくらとした唇はあの時のままだ。

「俺のこと覚えてる？」護は尋ねると、

えっ、と恵理子は首を傾げ記憶をたどる表情になり、すぐピントが合った表情で、

「加納君？」と言った。護は頷いた。

「久しぶりだね」

「本当に加納君なの？　じゃあ崇の弁護するっていうのは……」

「僕だよ」

恵理子は啞然としていた。あまりに困惑しているのか、買い物袋を落とした。恐れているのか、迷っているのか護には分からない。部屋に入れてもらうと、ただただかきこまるばかりで、お茶を載せたお盆を倒してしまい、あわてて雑巾で拭き取ったりしていた。

護は思い起こしていた。高校時代に恵理子と付き合っていたことを。二十年前。遠い昔だ。本当にもう昔のことだ。

「ごめんなさいね」拭き取る手を止めて恵理子は俯きがちで言った。お構いなくと、護は言った。

「今回は崇君の件で来ている」すると恵理子の口からため息が漏れた。

「申し訳ないわ。迷惑かけちゃって」

「僕は仕事だから、気を落とさないで」

恵理子はうろたえて首を傾げるだけだった。恵理子には今回の事件の概要を知らせた。そして裁判の過程についても話した。被告人の無罪を勝ち取るのではなく純粹に少年を更生させるために裁判を請負った、と。恵理子は俯きながら頷くばかりだった。

「一体どういう様子だったの？」護の問いかけに恵理子の涙が手の甲に落ちた。

「こうなることなら……」がっくりと肩を落とし、「プラハなんて行かなきゃよかった」

すると今度は怒気を含んだ表情で、あいつが悪いのよ、悔しい、あんな男と一緒にあって馬鹿

みたい、などと感情をぶちまけていた。（家庭の問題だ）護は心で唱えながら堪えた。枯れた愛に再び火をともしなんてむちゃな話だ。しかし恵理子は俯くなりなにも話さなくなり、沈黙は護を不安にさせた。大丈夫だ、大丈夫だ、そう自分に言い聞かせる。だが脈はどんどん速くなっている。真っ黒なねっとりとした液状のものが首を締め付ける。俺は恵理子の息子にだけ弁護するんだぞ。これ以上踏み込むなよ。するとそこから赤い光の帯が現れた。あの角田浩一の時感じた時のような。何か悪意を感じて護は目を閉じた。再び目を開けると恵理子は笑っていた。手を口に添える。悪賢い魔女のような表情の。

帰りの電車の中で恵理子の家族のことを考えた。どうやら恵理子は男に逃げられてしまったらしいこと。そしてその過程で崇が粗暴になったのだ。間違いない。おそらく子供の憤激がこの事件の根底を作っているのだ。

「……少年近藤崇は帰宅途中の被害者松本梨加に対して、衣服をはぎ取って強姦……」「持っていたナイフで心臓を突刺し、出血性ショックで死に至らしめ逃走した」

本当だよな、本当にこれだけだよな。

恵理子はなにかを必死に守っている。護の勘だが。恵理子の表情には妖気が感じられた。あの角田浩一の時に感じたような。危険で直に迫り来るような。

黒田は威信にかけてこちらを攻めてくる。彼の言っていた画期的な証拠とは何だろう？ ファイルを閉じて顔を上げると窓から紺碧とした夕闇が見えた。黒い雲の間から夕焼けが漏れているのを眺めながら、護は絶交したあの時の黒田の表情を夢想していた。

翌朝はきっちりと目覚めた。少し肌寒いが冷たい空気が肺に入っていく、その感じは悪くなかった。食パンをトースターで焼いてマーガリンをつける。香ばしいコーヒーをいれて、新聞を読んでいた。一面に別にどうということはない記事が羅列されている。閉じようとした三面目の週刊誌の広告記事に、崇の事件が掲載されていた。

「十七歳の狂った果実」サブタイトルは「鍛えられた肉体の性交遍歴」という見出しだ。書店は開いていないのでキオスクで買った。

「松本梨加だけじゃなかった！ 殺人まがいの強姦人生」と題されている。

……強姦殺人を犯して世間を騒がしてなおも反省のないといわれる少年Aだが、この少年の女性遍歴を本誌が独占レポート。少年の闇を探ると本誌は中学校時代に交際していた少女に行き着いた。本誌はその少女に独占インタビューした。この少女は少年が十二歳の時に交際していたという。その頃の少年を当時の少女は「最初はにかんで近づき交際をスタートさせると、急に乱暴された」という。どんなことをされたのか具体的に探ろうとすると少女は口をつぐむが、さらに突っ込んで聞いてみると、要するに体を欲していただけの関係、なのだという。しかもあの体躯で思い切り頬をひっぱたくといった粗暴な面を見せる。少女は本誌にこれ以上話すことはできない、と断ってきた。なぜなら「だって本当に怖い」のだという。オフレコでも必ず見つけ出し本当に殺される、と言うのだ。近所の声でもあの子は荒っぽい性格で河川敷でよく人を殴っていたという噂もあり、そしてどうやらある女に子供をはらませて、学校の先生も手を焼いていた、という声までもが聞かれる。餌食になった女性は数えきれないとも。一体なにかこの少年に粗暴な方向に向かわせたのか、この少年の心の闇は今後の捜査にも影響するだろう……

マスコミはどうしても悪人を作らずにはおれないらしい。護はこの手強い相手とも闘わねばな

らない。

*

.....近藤崇は平成四年九月十三日、東京のとある産婦人科病院で生まれている。恵理子がまだ高校生の時にできた子供で、父親はその男と別れさせ、墮胎させてプラハに転勤という形で日本を離れた。だが恵理子の母親は敬虔なキリスト教信者で秘密裏に産ませてしまう。一人暮らしをしている母親の親友にその子を預けた。そのためこの男は崇の認知をしていない。帰国後母親は癌で死ぬ。闘病中すべてを知った父親は激怒して恵理子と親子の縁を切った。それからの恵理子はスナックで働きそこで知り合った男と結婚。三人の生活が始まるがすぐ離婚する。崇の学業は不振で高校受験にも失敗し一年の浪人生活を送っている。母親は形式的に予備校にも行かせていたが、記録されている出席はほとんどない。そこで出会ったはぐれものの友人たちとの交遊が始まる。毎晩渋谷や池袋といったところで暇そうな女子高生と遊んだり、遊ぶ金欲しさに裏道に誘い込んでカツアゲなどすることが度々あり、数度の傷害事件で補導されたこともある。松本梨加との出会いもそういうありふれた日常の話でしかない。予備校の隣にある雑居ビルにアパレル関係の事務所があり、その事務員として働いていたのが松本梨加だった。誘ったのはどうやら梨加の方で、つきあっている男がいながらちょっとした火遊びのつもりで崇を誘惑したようだ。恵理子に子供をはらませた男の所在は現在調査中。恵理子は毎晩キャバクラやスナックなどで働いてなんとか生活しているのに、崇は恵理子の下に帰っては財布の金をふんだくるといふ。「あの子は怖かった」これは恵理子の友人たちがみな使う言葉だ。.....

ひどく不憫な話だ。恵理子が高校時に妊娠していて、それがもとでプラハにいつてしまっていたとは驚きだ。崇の凶暴な性格はその辺りにあるのだろうか。大きな腹をどう隠したのか、疑問は募る。恵理子をはらませた男は不明？ ちょうどその頃は護の熱が冷めてきた頃だ。ん、違うかな？ 十七の時だよな。ぞくとしたしびれが走った時、真理亜が茶を持ってきて治まった。落ち着かせて茶を飲むと、どうですか、と真理亜が尋ねた。

「よく調べてきてくれた。これで情状酌量を願おう」

被告のシャツについていた血液は近藤崇と松本梨加のものであること、目撃者の証言で被告人崇の服装などが一致してい、被告人が逃げている時に目撃された別の人の証言もまた同様だった。また、調書の別記に複数の医師による精神鑑定書があり、近藤崇には責任能力があることが立証されている。

さすがに黒田啓一だ、つけいる隙がない。ただひたすら罪を詫び情状酌量を訴えるか殺人そのものは認めるが「殺意はない」と、傷害致死を主張するくらいだ。だが情状酌量を認めさせるのは難しいだろう。いくら女の側がたぶらかしたのだとしても、態度が高圧的だし、そもそも補導されたという前科がある。なにより崇本人に反省させるような判決にしなければならない。崇に有利な「殺意否認」はあえて隠そう。傷害致死の刑罰を落とすどころにするには、とシナリオを描いていると、なにやら妙な音が聞こえてきた。讚美歌のような美しい旋律を少年たちが歌っている。嫌な予感がした。そして携帯電話が鳴った。黒田からだ。（どうだい立派な調書だろ、もう無罪放免なんて弁護方針はやめておいた方がいいぞ）そんな台詞が浮かんだが、意外にも沈痛な知らせだった。

「さっき拘置所から電話があった。角田浩一の死刑が執行された」と黒田は言った。

護はすぐに電話を切った。ただ怒りがあった。なにかが護を逆上させた。真理亜を抱いた。柔らかなソファの上で。月光に照らされた薄暗い室内で真理亜は微笑んでいた。真理亜を犯しているあいだじゅう、その怒りを優しく包んでくれた。いつでも真理亜は微笑んでくれた。護は真理亜の乳房に顔を埋め、泣いた。

ぴぴぴぴ、と目覚まし時計が鳴った。護はそれに起こされた。今日は今般の公判前手続のため護は地裁に赴く。昨夜から『罪と罰』を三分の一ほど読んでいた。時間が過ぎるのを忘れるくらい夢中になって、いつのまにか寝てしまったのだ。この年になって徹夜して『罪と罰』を読むなんて変わった奴だと自分でも思った。しかも裸で。その先は考えないようにして背広を羽織る。真理亜はまだ寝ていた。起こさぬようにして護は事務所を出た。

今日は暑い。じりじりと陽が護を焦がしている。額の汗をハンカチで拭い護は歩いた。昨日のあの寒さで今日はこれだと、体調がおかしくなる。それでも昨日護は証拠調べを夜更けまでしていたのだ。心臓がどくどくと打っている。途中で立ちくらみがあった。それでも行かねばならない。行くんだ、と奮い立たせた。

「公判前手続」とは、裁判の始まる前に検察側、弁護側の証拠や供述を集め、争点を明らかにする手続である。こうして公判の迅速化と一般市民で構成される裁判員に分かりやすい審理を行うのを目的で考案された制度だ。

裁判所内に入ると今度は冷気が護を襲った。クーラーがぶんぶんと唸りを上げて動いている。省エネは一時の流行だったのだろうか。そんなことを考えながらしっかりと歩く。

「調査A」と書かれた部屋に入る。ドアを開けると、ひどくかびくさい臭いが覆っていた。正面に向かって左側の長机に黒田が座っていた。「罪の意識のないものに、どんな刑を与えても意味をなさない」と解説した、あの黒田啓一だ。眼光鋭く睨んでいるのを察して護は眼を伏せながら歩いた。

正面には黒衣をまとった裁判官が三人並ぶ。向かって右側に女性判事が、中央には年をとった男が老眼鏡で首を傾げながらこちらを見ている。そして左端には若い男の裁判官がびくびくしながら座っていた。

裁判官は右側の長机に来るよう促している。その時護はふと思った。それは恵理子のことだった。もし彼女を妻として迎えば、幸せな家庭が作れるのではないかと。それに相対するように少年近藤崇が座っている。この不良小僧も養うことになるんだぞ、と埒もない妄想に自分でも呆れながら席に着いた。

少年近藤崇は足をだらりと開いて浅く座り、手首には手錠がはめられていた。近藤崇はこちらに挨拶するでもなく、ただ面倒くさそうにそうしている。あちこちを見まわしていた。まるでここにいる現実が仮想の現実であるかのように。あの恵理子の不敵な笑みを見せた様子が思い浮かぶ。恵理子は確実になにかを隠している。なぜ正直に話さないのか。それが息子への愛情なのだろうか。

「始めます」と中央の判事が声を発した。

「では検察側、起訴状の朗読を」

黒田はすっと立ち上がった。紺のスーツに赤のネクタイを締めていた。

「本年七月十一日午後十時ごろ神奈川県横浜市S区において、少年近藤崇は帰宅途中の被害者松本梨加に対して、衣服をはぎ取って強姦した挙句、持っていたナイフで心臓を突刺し、出血

性ショックで死に至らしめ逃走した。罪状および罰状、強姦殺人、刑法第二四〇条」

「では弁護側」と裁判官は護を促した。護はゆっくりと立ち上がった。

「無罪を主張します」黒田はため息をつく。

「被告人近藤護には、情状を酌量すべき家庭環境がありました。そこを考慮すべきと考えます」震えている 自分の言葉に不甲斐なさを感じながら座った。

「辩护人。今般において被告人近藤崇は、自分で自分の罪を認めている。彼は自分の意思で被害者松本梨加を殺害した、と自供しているのですよ。調書にも起訴状にもそのことが書かれている。きちんと読んで下さい」

しばしの沈黙があった。裁判官は、辩护人どうぞ、と発言を促した。

「取り調べはその様子の一部を筆記されたもので、この時誰が取り調べたのか、またどういった手法で問われたのかわかりません。酷い罵声を受けて有罪へ誘導していたことも十分考えられます」腕組みをしながらまた黒田はにやりと笑った。

「いかがですか」裁判長が検察を促すと、黒田は待ってましたかとばかりに立ち上がった。

「そういう異議が出ると思ひまして、ここに取り調べの一部始終を録画したビデオを用意しました。争点の一つの捜査資料として本件の裁判で再生いたします。今までの裁判ではあり得ないことでしたが、今回の犯行の重大さを正しく理解してもらうようにと検討した結果、このようなことになりました」意見を述べるとするりと黒田は着座した。

護はぎくっとした。取り調べの一部始終？ 信じられない。こんなことは今までの裁判では考えられない。もしこれが法廷で再生するなら、画期的なことだと賞賛されるだろうが。これが黒田の言っていた証拠か。ただそんな重大事を護はなにも聞いていない。

「どうして話してくれなかったんだ」護は語気を強めた。

小声で護は聞くと崇はこっちを向いてゆっくりと頷いた。笑みさえ浮かべている。

「いいじゃん別に。俺はさあ、殺すつもりはなかったって言えばいいんだろ？」

護はまたぎくっとした。「殺すつもりはなかった、それで殺人罪は免れる。あの女がいたいけな少年の心を弄んだって。俺さ衝動的になっていたんだよ。ていうか、事故？」

傷のある腕を軽く叩きながら崇は言った。すると急に厳しい視線を護に浴びせた。

「あんた隠してたね。俺をズタ箱に閉じこめるつもりだったんだろ？ 酷い奴。サイテ～だな、あんた」崇はゆっくりと前を向く。

無罪を主張しつつ徐々に検察の主張を言い聞かせ、非情な殺人を犯したのだ、と反省を促すという護の目論見は崩れた。それでも証拠調べは続く。黒田が証拠とされる写真や資料を取り上げて護が答弁すると被告人である崇が否定するという異常事態になった。

「辩护人と被告人の陳述には統一性がないように思いますが……」左側の若い裁判官が声を震わせながら発した。護は動揺を隠せない。

「まあ、それだけ弁護のしようがないと言うことでしょうか」黒田が笑みながら言うと、中央の裁判長が、

「では日を改めて公判前手続を行うことといたします」

護は黒田と崇に何とも言えない屈辱感を味わわされた。

数週間に渡る公判前手続を何とか乗り切り初公判の当日に、護はまた夢精した。なまめかしい夢だった。高校生の制服をした真理亜が馬乗りになって激しく喘いでいたのだ。真理亜のみだらな声で護はすぐ射精した。手をパンツの中に突っ込むと噴き出した精液で粘っている。エクスタシーの後のしらけたムード。全く、とため息をつく。そしていつもの頭痛がした。真理亜はいない。しばらく休みます、と言ったきり帰ってこない。昨夜はバーに行き一人で飲んでいて。もうあいつと飲むこともないだろう、と思い起こしながら。髪をかきあげようやく起きた。パンツをクローゼットの中から取り出しはき替えた。散らかっている床に文庫本が落ちていた。だいぶ読み進んでいた『罪と罰』だ。ちょうどラスコーリニコフが大地に接吻する場面にしおりが挟まっている。ラスコーリニコフが娼婦のソーニャに許しを請う場面だ。護はそれを床に叩きつけた。

崇との接見を何度も重ね、今般は殺人事件ではなく単なる「事故」だったという論理をでっち上げたのだ。あの夜梨加と軽いセックスをした後に外に出ると、梨加が別れ話を切り出した。崇はなんとかかよりを戻そうとした。すると梨加はいきり立ってバッグの中からナイフを取り出し崇に襲いかかった。もみくちゃになって腕を負傷した崇は恐ろしくなって逃げると梨加は追いかけてきた。その時梨加がつまづいて自分の胸にナイフが刺さってしまった。崇は懸命に逃げていたためその様子は知らなかった、というように。

秋を迎えようという時分、昨日まで真夏の暑さで今日はやたらと寒い。十一月下旬の気温だという。気象は完全に狂っていた。冷たい雨まで降りだした。法廷は一番広い部屋で行われることになった。世間はこの事件の関心を持っているあかしだろう。殺意を否認して事故だったと主張する。被告の「殺人ではなく事故」という内容を聞いてしまった以上、護はこの方針で弁護するしかないのだ。不本意だ。崇に犯行の反省を求めていたのであの「殺意否認」という文言を伏せていたのに。だれかが悪知恵を囁いたのだ。一体誰が？

中央の扉が開かれた。裁判官が重々しい黒衣を羽織って現れる。先頭にはあのベテランの顔をした裁判長が、それに続いて女性の裁判官が中央から右に就き、そしておどおどしている若い男性裁判官がその左に就く。そして私服の裁判員たちが続々入廷してきた。男と女の裁判員が三人ずつ現れた。私服といっても落ちついた色の服装だった。中央の裁判官が腰をおろすと一斉にみな着座する。

護の背のドアが開き少年Aが入廷してきた。法廷内の緊張は最高に達した。ふうといったため息が法廷内で反響する。テレビなどブルーシートが隠された顔を初めて見たからだろう。これがあの事件の素顔なのか。そう思っているに違いない。手錠をかけられ中に入ると護の後ろを通過して、裁判官席の前まで来て手錠を外され被告人席に着座した。ずいぶんと手荒い仕打ちだ、と護は思った。裁判員裁判は裁判員の固定観念を排するために法廷の外で手錠を外し入廷するのが通常だ。もしかしたら……と護は希望を繋いだ。心から反省してくれ、と。

「審議を始めます」中央の裁判長が述べ、一週間にわたる審理が始まった。

護は空をぼんやりと見上げていた。今日もしととした雨で、気温が十五度。冷たい風も吹いていた。裁判中は寒い日が続いたのに、明日からはまた真夏の暑さに戻るという。暑かったり寒かったり、と今年も異常気象なのだ。何もかもが異常なのだ。今日で終わる、終わってしまう。反省を促すため弁護を引き受けたはずだった。裁判が自分の手を離れ、口から勝手な主張をし

やべらせる。護にとってこの一週間で、一ヶ月にも、一年にも感じられた。今日判決が下ってしまう。空白の時間は過ぎた。護は昼の休憩を終え法廷に戻る。

黒衣の裁判官と普段着の裁判員がゆっくりと入廷する。護は嫌な予感を感じた。それは確信的なほど嫌な予感だった。

「審議を再開します」

裁判長の宣告に全員立ち上がって一礼し、再び着座した。

「判決を述べます。被告人は立つように」するとすくっと崇は立ち上がる。

「主文、被告人近藤崇を無罪とする」

その判決が下されると、後ろのマスコミ席で聞いていたものがどたばたと出て行った。それ以上に護は唖然とした。崇は小さな拳をつくっていた。笑みながら。確かにしていた。

公判中の崇の態度は名演技だった。親が離婚したこと。鬱屈したはけ口が見つからずに悶々としていた日々。学校でのいじめられたこと。涙ながらに訴え続けた。黒田が提出したあの画期的な証拠は、検察の激しいいじめと映ったのだろう。ぶっきらぼうな返答をして吊し上げているところがまずかった。証拠のナイフについて梨加が刺そうとしたからだと涙ながら供述していたにもかかわらず、「お前がしたんだ、吐けよ！」と目の前で机に拳を叩きつける様子が映っていた。裁判員の一人がこのところを尋ねると「検察の尋問は怖かった」と崇は涙ながらに訴えた。裁判員たちは検察側に疑念を感じたに違いない。全体的には崇が犯人だ、という内容になっていたが情報とは細かいところが強調されて記憶されるものだ。マスコミの取材にも変化があった。梨加の肉欲にうぶな少年が翻弄させられたという情報が流れ、当初の罪に疑問を投げかける一幕があった。それらすべてが裁判員の決断を鈍らせる。検察側の求刑は少年犯罪の最高刑「無期懲役」だったにもかかわらず、ほとんどのマスコミは曖昧に終始していた。マスコミは少年周辺をろくに取材をしていない。馬鹿野郎！

黒田は間違っていない。黒田の捜査は完全なものだ。不審なところは全くない。それは弁護している護自身が知っている。しかし結果は敗訴。もし黒田が判事だったなら「極刑」を判断していたはずだ。しかし少年法に縛られて仕方なく「無期懲役」を選択する。絶対そうしたはずだ。そうして挑んだ今回、正義は司法の場で屈してしまった。あの激怒の顔がそれをよく物語っている。一声かけてやりたいが、もうああいう関係はあるまい、と諦めた。

裁判後の記者会見で黒田は、黒田は青筋を立て腕組みをしていた。

「このような判決ではとうてい納得できない、控訴をすることになるだろう」と述べた。

護も別の席で記者会見を行った。「勝訴ですよ。どうか一言」「被害者家族の理解は得られると思いますか？」「裁判員に見せたビデオの内容があまりにも過激で、逆に弁護側に有効に働いたという意見については？」

過剰なライトとフラッシュに照らされている。護は黒田や崇のあの態度が心のほとんどを占めていて別に感想も何も発言できず、ただのらりくらしと頷いたりするのに留めた。

翌日突然真理亜が辞表を提出した。純白の封筒にしっかりとした毛筆で「辞表」の文字が滲んでいる。

なぜ、と聞いても答えない。陰性の表情だったがいつもの軽いトーンの声で話す。

「結婚するんです」

「嘘だろ？」

君にはここにいて欲しいと説得すると、なにぶん相手のこともありますし、とか、これで逃すと一生結婚できませんよ、とか言う。

「俺の側にいて欲しいんだ」

真理亜は眉をひそめ見下し重いトーンで、これまでありがとうございました、と見下したようにお辞儀をし、事務所を出て行ってしまった。

その日からの護は毎日のように恵理子のもとを訪れていた。こんな孤独を感じながら一人でなど生きていけない。護は本当の暖かさを欲していた。何かにすがりたかった。

とうに夏は終わった。もう晩秋を迎えようとしている。海辺は茫漠と閑散としていた。小学校もとうに始まっている。ただ何かが足りない。子供たちのかけ声とかじゃれ声とか。

護の勝訴で法曹界では名が知られるようになったが、別に今までの暮らしがよくなった訳じゃない。なぜ護はこの場に来るのか。怯えがあった。黒田がいない。真理亜もいない。気づくと独りぼっちだ。冷えた風が凧がれ、ちりんと風鈴が鳴った。恵理子は茶碗に麦茶をいれて現れた。からんからんと氷の音がする。護は幾分寒い感じを覚えた。一口飲んでみるとひどくぬるかった。恵理子は終始笑顔だった。それは無邪気に喜んでいようしか思えないのだ。

「あの子に罪はないわ、あるとしたら私よ」恵理子は笑みながら続けた。

「あの子のことはもう大丈夫。あなたがいるもの」

ああ、と護はうなだれた。高裁、最高裁……「そうじゃないわよ」恵理子は続けた。

「やっとあの子は『私の子』から『私たちの子』になったのよ」

ん？ と護は面を上げた。「私たちの子？」言いながら護は麦茶を口に含むと、妙に暑苦しさを感じた。

「だからあの時あなたが……私を……」

空は急に暗くなり間もなく夕立になった。護はごくりと麦茶を飲み干した。だんだん過去をたぐり寄せている。護の体中の汗腺が緩み、汗が噴き出そうとしていた。恵理子はいつの間にか傍らにいる。（俺はお前の過去を知っているんだぞ）突然黒田のあの言葉が蘇る。ぴかっとあたりが光った。護の掌に恵理子の指がしのびよる。

「信じてた、絶対再会できるって……」（殺すつもりはないって言えばいいんだろ？）

間もなく溢れんばかりの雨音が恵理子の言葉を切り裂いた。護は絶句した。恵理子は続けた。

「……もう逃げないわ。だから……安心して」雷鳴が轟く。

（お願い戻って、私を捨てないで）護はぞっとした。くっきりと思い出した。冷めていたのに、最後に一度、との懇願されたあの一夜だけ。なけなしの一夜だったはずだ！

恵理子と自分の関係を知っているのは誰だ？ 黒田にその過去を教えたのは誰だ？ 崇の父親は誰だ？ あの悪知恵も！ 記憶の海原から「あの男」が浮かんでくる。

（恨みは残ります）（社会ってやつにね）（恨みは誰かが背負わねばならないんです）

「あ、あいつか！」

恵理子の小指が護の指をいじる。そして両手で護の左手を包んだ。手が震える。足が震える。体が強張る。背中に冷たい汗が滴った。（了）